

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

デザートフラワー

2009年・ドイツ、オーストリア、フランス映画
配給/エスパース・サロウ、ショウゲート
127分

2010 (平成22) 年 12 月 30 日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：シェリー・ホーム
原作：ワリス・ディリー
出演：リヤ・ケベデ/サリー・ホー
キンス/ティモシー・スポー
ル/ジュリエット・ステイー
ブンソン/アンソニー・マッ
キー/クレイグ・パーキンソ
ン

👁️👁️ みどころ

ソマリアは内戦で無政府状態の国。そんな国から、なぜ世界的スーパーモデルが？また、内向き志向のニッポン人は、彼女の生きざまから何を学ぶ？

それはそれだが、本作最大の問題提起はFGM。FGM＝女性性器切除とは一体ナニ？本作を契機に中国の宦官（かんがん）制度とあわせて勉強し、あなたがいかなる社会的役割を果たせるかを、しっかり考えてみなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■デザートは食後のデザートではなく、砂漠■□■

『デザートフラワー』という邦題を見て、本作がこんなに大変な問題提起作だと気づく人は少ないはず。また、英語力の乏しい日本人が「デザート」と聞いてまず最初に思い浮かべるのは食後のデザートであり、砂漠ではないはずだ。食後のデザートはDESSERT、砂漠はDESERT。しかして、「DESERT FLOWER」とは「砂漠の花」だ。

なるほど、本作の主人公であるアフリカの遊牧民生まれにして世界的スーパーモデルになったワリス・ディリー（リヤ・ケベデ）の華やかな姿を見ていると、そのタイトルにうなずける。ファッションの世界やモデルの世界について私はほとんど知らないが、そこが（そこも）激烈な競争社会であることは当然。一流モデルとして認められるまでには、華やかな表舞台とは別のさまざまな裏世界も……。そんなことは容易に想像できるが、さてワリスの成功には・・・？

■□■ソマリアからイギリスへ！「内向き日本人」はいかに？■□■

映画は勉強。それを痛感させられることが年に数回あるが、本作はまさにその一本だ。

島国ニッポン、閉塞社会ニッポンが世界情勢に疎いのはある程度仕方ないが、とりわけ疎いのがアフリカの情勢。あなたはソマリアという国の名前を知っていても、それがアフリカ大陸のどこに位置しており、どんな問題があるか知ってる？また、アフリカのウガンダや南アフリカ共和国がどこにあり、どんな問題が起きたか知ってる？ウガンダの問題は『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）を観れば明らかだ（『シネマルーム14』106頁参照）し、南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ大統領のことは『マンデラの名もなき看守』（07年）を観れば明らかだ（『シネマルーム20』146頁参照）。また、『ルワンダの涙』（06年）（『シネマルーム14』101頁参照）を観れば、1994年の「ルワンダ虐殺事件」のことがよくわかる。

映画冒頭に登場する美しいソマリアの砂漠のシーンは印象的だが、本作前半は13歳の時にお金と引き換えに結婚することを強要されたワリスが何日もかけて砂漠を抜け出して祖母の家にとどり着き、さらにソマリアの地からイギリスの大都会ロンドンへ旅立つ姿が描かれる。なぜソマリアの若い女の子が1人でロンドンへ行けることになったのかはあなた自身の目で確認してもらいたいが、面白いのは、英語もろくにしゃべれないワリスが浮浪児のような生活を続けながらもアパレルショップの店員でダンサーを目指しているイギリス人女性マリリン（サリー・ホーキンス）と知り合いになり、同居生活を始めるストーリー。ストーリーのようにマリリンの後をついていくワリスもワリスだが、それを受け入れるマリリンもマリリンだ。しかし、言葉は十分通じなくても心と心が通じ合うことがあることは、この2人の出会いとその後の2人の二人三脚の歩み（？）を見れば明らかだ。現在わがニッポン国は内向き志向の弊害が顕著。そんな日本の若者は、このワリスの頑張りをいかにみる？

■□■世の中、キレイ事ばかりでは・・・？■□■

島国ニッポンでは出入国の管理は厳重で、大量の移民の受け入れには反対論も多い。しかし、『この自由な世界で』（07年）にみるように、ヨーロッパでは大量の移民による不法滞在問題が大きな社会問題になっている（『シネマルーム21』247頁参照）。カンヌ国際映画祭の常連であるダルデンヌ兄弟が監督した『ロルナの祈り』（08年）（『シネマルーム22』133頁参照）や韓国映画『ダンサーの純情』（05年）（『シネマルーム19』125頁参照）では偽装結婚問題がリアルに描かれていたが、祖母からパスポートを肌身離さず持っているように言われても、生きるに精一杯の少女がその更新手続まで頭が回らなかったのは仕方ない。しかし、店員として働いていたハンバーグ店で一流のファッションカメラマンであるドナルドソン（ティモシー・スポール）に見そめられ、モデルとしての第一歩を踏み出したにもかかわらず、パスポートの有効期限が切れてしまっていたことが判明したから大変。

裏の世界で1人コソコソ生きていだけなら楽だが、堂々と表舞台で成功を納めるため

には、さまざまな手続が必要だ。いくら前途有望なスーパーモデルでも「法の下での平等」は貫徹されるから、不法滞在者となったワリスの強制送還は当然。誰もがそう考えたが、そこで現れた救いの神が、前々からワリスに心を寄せていた下宿の住人ニール（クレイグ・パーキンソン）だ。不法滞在を免れたうえ、その将来性によって無制限滞在許可をもらう。そのためニールはワリスとの結婚を承諾したのだった。しかし、ニールには恋人がいたのでは？ さあ、そこらあたりには問題山積だし、私は弁護士として表立って偽装結婚を認めるわけにはいかないが、世の中キレイ事ばかりでは・・・。

■ FGMとは？本作最大の意義はここに！ ■

あなたは、昔の中国に宦官（かんがん）という制度があったことを知っている？ 宦官とは去勢された官吏のことだ。これは、皇帝や後宮に仕える官吏になるために、男性が男性性器を切り取るものだが、アフリカにFGM＝女性性器切除という制度（社会的慣習）があることを私は全く知らなかった。パンフレットによると、これは思春期までの女兒の外性器を切り取ったり、その一部に傷をつけたりする社会的慣習で、現在もアフリカや中東などを中心に、イスラム圏、土着宗教、キリスト教徒においても行われているとのことだ。この習慣は貞操・純潔の象徴とされるが、施術直後に出血や激烈な苦痛を伴うだけでなく、長期的にも性行為や出産時の痛み、感染症の危険、難産や不妊、トラウマといった弊害をもたらす。そして、何らかの形でFGMを受けている女性は約1億～1億4000万人と言われ、現在も、推計で毎年300万人の女兒に切除が施されているとのことだ。

ワリスは3歳の時にこのFGMを受けたそうだが、本作にみるそのシーンには思わず目を背けずにはいられない。ロンドンでマリリンと共同生活を営むワリスはマリリンがボーイフレンドと奔放なセックスライフを楽しんでいる姿を見て愕然とし、自分の貞操観、結婚観を述べるが、それを聞くだけで何とすごい世界（観）があるものだと痛感。そんなやりとりの中で、互いの女性器を見せあったワリスとマリリンの絆がより一層つながったことは言うまでもない。映画を見てはじめて「こんな世界があったのか！」と思ひ知られることが時々あるが、まさに本作はその一本。本作はある意味では世界的スーパーモデルとなったワリスのサクセスストーリーだし、ワリス役を演ずる現役のアフリカ系スーパーモデルであるリヤ・ケベデの美しさにはホントに惚れ惚れする。しかし、本作最大の意義はFGM＝女性性器切除という制度の存在を世界に知らしめたこと。そして、ワリスは1997年に雑誌『マリ・クレール』のインタビューではじめて自分が3歳の時にFGM（女性性器切除）を受けた事実を明かすとともに同年、アナン国連事務総長より、FGM廃絶のための特別大使に任命され、以降FGM廃絶のための運動に献身することに。

私は数年前からチャイルドスポンサーとなり、数名の養親になっているが、日本人はこんな映画を機会に広く目を世界に向けるとともに、少しでもいいから自分のできる範囲内で世のため人のための行動に参加しなければ。 2011（平成23）年1月5日記